



宇宙飛行士ピルクス物語
/ *Opowieści o Pilotach Pirxie* (1971) / スタニスワフ・レム (深見弾訳)
/ 早川書房 (12/15刊・¥1,800)

レムは、理性的な作家である。妥協を許さない科学的態度が、理性を裏付けている、という。そんな姿勢が作品を硬直化させるのだと、批判する者もいる。——けれども、どこかに誤解があるのではないだろうか。

高度の知能を備えたロボットは、必然的に人間と変わりがなくなる。なるほど、それはレムの科学的演繹の生み出した、一つの結論かもしれない。しかし、突然、山に登ろうと思いたったロボット（「事故」）や、過去の亡霊を電子回路に宿したロボット（「テルミスス」）を描くとき、レムは決して「理性」を表現したわけではなかった。それは、主人公ピルクスが、ロボットの行動に垣間見た、人間性の一端である。そして、理性と理性の間にある、この人間的ロマンこそが、作者の主題といえるだろう。ロボット物は、一種のゲーム小説だった。本書も、たしかにゲームとしての体裁で書かれてはいる。だが、本当の意味の謎解きは、行なわれていない。ただ、「人間性」という底なしの奈落が、口を開けているばかりだ。そこが、本書を、宇宙物でも未来物でもない、レム流の「われはロボット」としている、大きな要因なのである。（俊）